大阪府警・西成署
1・2 私服警察官による性（セクシャル・ハラスメント） 暴力
居直り暴行 を許さんぞ！

抗議申し入れ書（全文より抜粋）

私たちは今、「許せない！」怒りでいっぱいです。

一九九一年一月二日。釜ケ崎越冬活動のなかで私たちは、釜ケ崎内外にいる野宿者たちを励まし、野宿者への差別的な暴行やいやがらせから、野宿者の「いのち」を守るための「人民パトロール」（釜ケ崎～梅田）に、参加していました。

しかし、そのパトロールに対して、大阪府警・西成署は、多くの機動隊員・警察官を動員して、私たちの行く先々を妨害。機動隊の楯で道をふさぎ、殴る蹴るの暴行。また、参加者の顔をビデオやカメラで撮りつづけ、私たちの人権・肖像権をことごとく侵害していました。

さらに、梅田地下街・JR大阪駅構内に入ると、機動隊のかわりに多数の私服警官がパトロール隊に張りついて、さまざまないやがらせ行為を、くり返してきました。

JR大阪駅東口切符売場付近では、パトロールに参加していた女子高校生（十八歳）に対して、「早よ歩け！」と私服警官が、たびたび肩を押してきました。

そんな中、さらに彼女に近づき、体に触れようとしてきた私服警官Aに対して、「さわらんといて！」「なにするの⁉」と、彼女と一緒に歩いていた女性が、彼女とともに抗議しました。すると、周囲にいた私服警官B、Cら七～八名が、「さわったれ、さわったれー」とはやしたて、増長した私服警官Aは、「ブスー！」などの暴言を連発。

そして、さらに私服警官Aが発した卑劣きまわりない暴言。

「おまえら、オッさんらにヤラせてんのやろ！　公衆便所！」。

この、個人の人格を無視し、女性の性をモノとして卑しめ、はずかしめる差別的言動に怒った私たちが、「謝れ！」と声を上げると、私服警官Aは、（駅構内の下り階段で）労働者の一人を、背後から蹴りあげ、突きおとして逃走しました。さらにその後も、こうしたAの言動と同様に、B、Cら、その他多くの私服警官が、パトロール隊に終始つきまとい、特に女性をねらっての性暴力・差別発言をしつこくくり返してきました。

そして、地下鉄「動物園前」出口から地上に出たところ、再び私服警官Aが、先の女子高校生に向かって、笑って舌を出し、からかうなどのいやがらせ行為をおこない、さらに今度は、それまで私たちの顔を写真にとっていた私服警官Dが、背後から駆けよって近づき、通りぎわに「ヤラせてんのやろ！」と、あざ笑うように、指でファック・サインをつくって突きだし、走り去りました。

翌日、一月三日。釜ケ崎地区内の人民パトロールで、再び妨害・弾圧行為に出ていた私服警官の一団の中に、昨夜の私服警官Bがいることを、仲間の女性の一人が発見。

人民パトロール終了後、私たち数名が、発見者の女性とともに、「昨日の行為について説明せよ！」と追及したところ、私服警官Bはたちまち、タオルで顔をかくし、他の私服警官たちに守られるように、西成警察署内に逃げこみました。

「性暴力警官、出てきて謝罪しろ！」。西成署前で抗議する私たちに対して大阪府警・西成署は、ただちに多数の機動隊員を動員し、たった三十人の私たちを、約三百人の機動隊員が取り囲んで、楯の水平打ち、殴る・蹴るなどの暴行を次々に加えてきました。

機動隊員数人がかりの暴行を受け、たおれた労働者は、その後救急車で運ばれて、十六

日間の入院。また、私服警官Bの発見者の女性は、警官から氏名を連呼されるなか、西成消防署海道出張署前で、機動隊の指揮官によって、指揮棒で後頭部を殴りつけられ、「頭部打撲・一週間の安静加療」から「脳浮腫」の状態にさせられました。

さらに機動隊の楯の前で、声を挙げて訴える女性たちの姿を、「公衆便所！」と差別発言を発し、性暴力をくりかえした側である警察官たちが、何度もライトで顔などを照らし出し、写真やビデオを撮りつづけ、ある警官は、「撮ったるわ！」とニヤニヤ笑いながらシャッターを切りました。

職務中の警察官の性暴力・差別発言に対する、何の武器も防具も持たない私たちの、まったく正当な謝罪要求に対して、大阪府警・西成署は、再び暴力行為でこたえ、私たちの人権をことごとく踏みにじりました。

こうした、職務執行中の警察官による、度重なる性暴力。それは、街の中、電車の中、職場や学校や家庭や、日常のあらゆる場面で、女性の人格を踏みにじり、女性の性をモノとして卑しめ、辱めるすべての性暴力を、根底で支え、さらに助長し、生みつづけている国家権力そのものの性暴力にほかなりません。そして、自分たちの性暴力に対して居直り、抗議の声を上げる女性たちを二重三重にさらし、おとしめ、痛めつけた、警察の暴力行為。これは、性暴力に対して、女性が声を上げ、たたかおうとすることを、さまざまな力でおびやかし、封じこめて抹殺しようとする、今の日本の社会の性暴力行為そのものでありわたしたちは絶対に許すことはできません。

また、日雇い労働者を切り捨て、差別する大阪市や大阪府の殺人的な行政によって、野宿を強いられ、凍死・病死に追いやられる野宿者のいのちを守る、釜ケ崎越冬闘争に対する弾圧・分断であり、絶対に許すことができません。

わたしたちは、これらすべての性暴力・差別発言・暴力行為に対して、厳重に抗議し、以下のことを、ここに要求します。

〔要求事項〕

1、大阪府警本部長および西成警察署長は、私服警官A、B、C、Dらの氏名・所属部署・階級を明らかにし、これら一連の性暴力・差別発言・暴力行為の責任を認め、見解を明らかにして謝罪すること。

2、私服警官A、B、C、Dは、自分たちの性暴力・差別発言・暴力行為に対して、見解を明らかにし、誠意を持って謝罪すること。

3、大阪府警本部長および西成警察署長は、今回のような、警察官による性差別・女性差別をいっさいなくすよう、性暴力・女性差別に対する考えをあきらかにし、積極的に取りくむ具体案を示すこと。

4、大阪府警および西成署は、釜ケ崎越冬闘争および日雇労働者に対する、日ごろの差別的な監視・暴行・弾圧行為をやめること。

5、大阪府警本部長はおよび西成署長と私服警官A、B、C、Dは、以上の要求に対して、次の日時までに文書を回答し、次の場に出席して、謝罪すること。

日時・一九九一年三月三十一日(日)午後一時

場所・大阪府立労働センター　六階大会議室

以上。

一九九一年三月六日

警察の性暴力・差別発言を許さへん会

★

3月6日　大阪府警本部・西成署に抗議文提出。西成市民館にて抗議討論集会。

3月25日　大阪府警本部（警備第二課・渡辺）より、〝電話〟回答。「調査の結果、判明しませんでした」。再度、文書による回答と「どういう調査をどのように行ったのか」説明することを要求するが、返答なし。

3月31日　府立労働センターにて公開シンポジウム「権力からの性差別！　あなたならどうする⁉」開催。

★

4月末現在　あらたな〝抗議〟の形として、又これまでの〝たたかい〟の総括として、さらにあらゆる〝性暴力を許さない〟思いとつながり、行動していくために――。分冊パンフレット（警察の性暴力・差別発言を許さへん会」女性メンバー編・男性メンバー編）を考案・作成中。

アメリカのホームレス

1989年夏から１年間アメリカでホームレスの問題と取り組んだ吉岡基さんに話を聞きました。聞き手は田中豊さん。

吉岡基さん

田中豊さん

対談

吉岡基さんは釜ケ崎で日雇労働をしながら，木曜夜まわりや医療活動に参加している協友会のメンバー

田中豊さんは，工場労働者の現役時代は組合運動に参加。退職後はボランティアとして釜ケ崎の活動に参加

なぜアメリカへ行ったか

田中　アメリカへ吉岡さんが行かれた動機からまず。

吉岡　具体的にしますと長くなりますので、動機だけ話します。アメリカから学生がここ数年夏になると交換ということで日本に来てました。釜ケ崎にも来まして、日本にホームレスがあるのに驚いた。彼らと話してアメリカのホームレスのことを知らされ、ごつい問題だと気づかされる。その頃から新聞などマスコミも少し報じています。

田中　「アエラ」なんかにも出ていましたね。

吉岡　冬に寒波でホームレスの人々が凍死してしまう。そこで市役所を開放しホームレスの人々を保護したという話も読みました。釜ケ崎では何もしないのでこの点も驚いた。

田中　行政も動いた。

吉岡　行く前の話ですが。数も多いこともあり関心があったが何せ金がない。たまたま、つてをたよって、学生の交換プログラムに乗っかってアメリカへ行ったんです。

田中　釜ケ崎のホームレスとアメリカのホームレスはどんなに違うんですかねー。

吉岡　正直言ってわかりません。ホームレスということばが、日本にはない。アメリカでは、路上で生活している人、緊急の福祉住宅に入っている人……。

田中　そんなのがあるんですか。

吉岡　そんな人も含めて、ホームレスと言っています。

田中　ホームレスの階層というか階級はどんなんですか。資本主義社会から排除されたというか。

吉岡　全体的なことは解りません。行っていた町で見た限りの話ですが……。その町では八割は黒人、一割がプエルトルコ、一割が白人。

田中　プアホワイトもいてるんですね。

吉岡　えー、もちろん。地域や州によって事情は異なります。

田中　どんなに違いますか。

ニューヘブン市

吉岡　ぼくの行ったのはニュー

ヨークのさらに北のコネチカット州のニューヘブンです。

田中　結構寒いところでしょう。

吉岡　えー、冬は零下二〇度にもなります。

田中　カナダよりですね。

吉岡　えー、人口比からいいますと白人が多いんですが、貧しい人には、割合から言うと黒人が多い。

田中　子ども、女、家族ずれもいますか。

吉岡　子どもづれの家族、母親には福祉制度、母子保護があって、緊急の福祉住宅に入れ、路上で生活しなくていい配慮があります。

田中　その場合は、ずっとそこに居られるんですか。

吉岡　いいえ。

田中　何ヶ月とか何年とか決まっているんですか。

吉岡　ぼくの行った町では、行政がやるもの、民間と行政が半々のもの、民間だけのものがあるんですが、家族に対し、女性に対し、単身者に対してというようにいろいろあります。形は違いますが。

田中　老人もありますが、全部の施設を満杯にしても入りきれないほど、宿のない人は多い。

田中　ニューヨークではその数が三十万人と聞きましたが。

吉岡　アメリカ全土では三百万人と言われています。

田中　やっぱり三百万人も。

吉岡　政府発表では何十万ということです。

田中　面白いですね。

吉岡　実数は一人一人数えるわけではないから、わからないこともあります。でも民間調査機関の発表では三百万人以上なんです。

田中　この前の「アエラ」を見ていたら、青年がダンボールの中で寝ている。あれだったら冬、凍え死んでしまいますねー。

吉岡　ぼくの行ってたニューヘブンという町の人口は十五万人弱です。そこにはホームレスの人のために無料宿泊所が一つあったんです。定員五十人。男女泊まれる。

田中　それは、キリスト者の施設ですか。

吉岡　民間と行政が一緒にやる半官半民です。

田中　民間と言うのは、ボランティアがやる。無料奉仕。

吉岡　当初はそうだったんですが、行政も補助金を出すようになった。

田中　そうですか。

裁判所の命令

吉岡　ぼくが行ったときに、丁度一つの裁判が始まっていたんです。その裁判は、どの施設にも入れない一人の人が、男の人ですが、自分はホームレスだが、屋根のあるところに住む権利、食事をする権利があるという裁判です。市に対して訴えを起こした。

田中　あー。

吉岡　半年もたたないうちに、ほぼ全面的に本人の言うことを認めた判決を出しました。ホームレスの人たちのために市が無料宿泊所をつくりなさいという命令が出て、それが出来たときです。

田中　その点が面白いですねー。日本だったらとてもそんなことはできない。

吉岡　びっくりしました。施設管理、職員の給料など、月にしてもかなりの予算がかかるものがポンとできた。市の予算でできた施設で働くことになったんです。

田中　それは全くキリスト教とは関係がない。

吉岡　実は、関係あるんです。その前の冬に、キリスト者が中心になって越冬、寄せ場で言うところの越冬をしている。寒いですから寝るところがない。駅の建物を緊急の宿泊所にしてしまう。冬だから駅の待合室には暖房が入っている。その待合室に寝泊まりする。

田中　そこには何日もおられんでしょう。

吉岡　一冬だけ、みんなで炊き出しなんかした。

田中　一日もおられる？

吉岡　ほんとはあかんでしょう。駅の方も嫌やし、警察も妨害する。でも寒さが厳しいから追い出すことはできない。世論も応援していた。

田中　面白いですね。ちゃんと事態に対応できるし。すごいですね。

吉岡　そうですね。その流れの中で裁判が起こって、市に対する命令が出たんです。ぼく自身にとってはびっくりした事です。

田中　日本とは全く対照的ですね。日本では裁判起こしてもあかんなァー。

吉岡　えー。

田中　日本では、ホームレスの人の方が敗けますね。

ホームレスを生み出すメカニズム

田中　ホームレスを生み出すメカニズム、あるいはホームレスの人々の権利意識はどうですか。釜ケ崎の人々と比べてみて。

吉岡　それは、かなり違いますね。ホームレスを生み出す構造は資本主義だから……。

田中　同じですか。

吉岡　釜ケ崎だったら産業構造が変わるときにはき出される人たちが仕事を失う。これはアメリカにもあると思いますが詳しくはわからない。生活して思ったことは、人種差別が、すごく大きい。

田中　白人が差別する。

吉岡　その町自体が、ホームレスに限らず分かれている。白人の住むところ、ヒスパニックの人たちの住む地域、黒人の住むところがはっきり分かれている変な町なんです。

田中　そうですか。

吉岡　丘の上は、上流階級の住むところ、下の方は、黒人が住み、その隣りにはヒスパニックが住む。かなり差別的な町の構造なんです。

田中　アメリカではそんなところが多い。はっきりしている。差別が。

吉岡　そんな町なので、特に思ったんですが。先程も言いましたが、ホームレスの人は八割が黒人の人たち。実際仕事を失った人たちが多い。その町では、以前はウインチェスター。

田中　名前聞きますね。

吉岡　鉄鋼を生産する町で、そこで働く人が必要だと南部からどんどん人をつれてきたという歴史的背景のある町なんです。そこが、いまは、会社が動いていない状態で、黒人たちは増えたけれども仕事がなくて、失業した黒人たちが町で生活していた。

田中　するとホームレスの人たちの中に熟練工もいるし、不熟練工もいてることになる。

吉岡　ええ。いまは、ほんとに仕事がない。ホームレスの人々の二世、三世の時代に入っている。青年たちもホームレスの状況の中で育って来ている。彼らは小さいときから教育にしても社会的援助にしても、権利にしても得ることが出来なかった。

田中　すると、中でホームレスを再生産することになる。

吉岡　だからぼくのいてた町ではホームレス全体の四割ぐらいは若い青年なんですよ。十代後半から二十代。

田中　不熟練工となるわけですね。仕事はないんですか。

吉岡　その町にはなかった。

田中　アメリカ全体ではどうですか。

吉岡　全体的なことはわかりませんが、その町にはエール大学という大きな大学があるんです。大学で持っているような町です。これといった産業はなかった。大学関係の仕事につかない限りは、生活がでけん。

田中　わたしなんかの古い考えでは、アメリカは金持ちの国というのが抜けない。聞くとホームレスが何百万、どうなってんでしょうね。富の分配の不公平は、いまでも続いてんでしょうか。

吉岡　話はすこしずれますが、ホームレスに取り組んでいる人たちは、キリスト者が多かったんですが、いわゆる無料宿泊所とか炊き出しをやっている人なんですが、金持ちが多かった。金持ちが中心に活動し、そこに家のない人たちが集まって来る。ごつう差があるなと思った。釜ケ崎でもそうですが、アメリカは差がえぐいですね。

田中　わたしは年金が十五～六万ですが、それでも有り難いと思っています。アメリカは年金はないですか。企業年金は発達していると聞きますが。

吉岡　よくわかりません。

無料宿泊所

田中　無料宿泊所を運営するキリスト者たちの中に、何か問題があったと聞きましたが。

吉岡　先の裁判の結果、市が建物を作ったんですが、働く人がいない。

田中　中でねー。

吉岡　市の役人って言ったかて、経験がないので、先の越冬グループにまかされた。市の方が予算を出した。渡りに船です。その中にぼくも入らさせてもらった。汚い話をしますと、ここで金が動く政治が動くんですね。

田中　やっぱり。

吉岡　市が丸っぽ予算を出すんですから運営をめぐって、どこのグループが取るかどうか、どこの教派がするか、争われる。一つはやることで社会的な地位も上がり、教会の評判もよくなる。施設はええことやなー、すごいことやなーと思った反面、実際には汚い政治的なこともあった。だから、商売として割り切ってやる人も多かった。

田中　給料といっても飯が食えるぐらいは出る。

吉岡　公務員給が出る。

田中　二十万〜三十万円。

吉岡　はっきりわかりませんが、公務員、市の公務員の通り出る。

田中　行政は金を出すが文句言わないんですか。

吉岡　そりゃぁー言いますよ。その時丁度、市長選があり、白人市長から市民団体支持の黒人市長に代わった。

田中　白人から黒人に。

吉岡　それは、その市では初めての出来事でした。

田中　代わると市政はどんなに変わるんですか。具体的に。

吉岡　具体的には、その市長の手腕にもよるんでしょうが、前の市長があまりにも保守的だったから、それに比べると黒人市長はましでした。もう少し先のことを言えば、先の無料宿泊所が半年の間に二つ出来た。

田中　十五万の町にですか。

吉岡　ええ。十五万の町に。民間のやっているのは他にも沢山ありますが。

田中　民間と言うのは。

吉岡　教会が自分たちでやっていたりしてるんですが、市が丸っぽ金を出して運営するのが半年で二つ出来た。二つ目が出来たのにも理由があったんです。冬を越す前、十月に、一人の人が路上で亡くなった。十月に凍死しはった。町で社会問題になり、新聞も連日特集を組むぐらいで市が裁判所の命令で二つ目を作った。しかし、去年六月ぼくが日本に帰るとき、市の方から、一方的に通達を出して来た。市の無料宿泊所としては、一ヶ月間だけは保護しましょう。約一ヶ月で保護を打切りますので、それぞれは一ヶ月後、ここで寝泊まりしなくてもいいように自立してくださいとの命令を出しました。

田中　そうですか。

吉岡　それで、無料宿泊所のグループは、通達に腹をたてて、このままやるわけにはいかんとスタッフを降りたわけです。市の方は予算がないと結局は逆襲にかかりました。

田中　一ヶ月の予算てどれぐらいでしょうね。宿泊所のスタッフはどれくらいでしょうか。

吉岡　さあー、十人ぐらいでしょうか。

田中　あとはボランティア。

ボランティア

吉岡　面白かったのは、ボランティアは、宿泊所では手伝わない。こわがって。炊き出しとか、炊き出しを運ぶ方はやるんですが、実際には配りません。

田中　こわいんでしょうか。

吉岡　日本だって同じでしょう。

田中　女の人もボランティアで来てますか。

吉岡　きてますよ。でも実際には、ホームレスの人たちとはつき合わない。それを見ていて、こんな差別がアメリカにもあるんだなァーと思いました。

田中　話もしない。

吉岡　そんなんばかりではない

んですが。ぼくは勝手にアメリカ人は、そんなことしない人たちだと思い込んでいましたから。一緒ですね。

田中　日本と文化はちがうけど、施設は同じですね。

吉岡　ぼくは、施設をやる人にはあまり興味がなかった。むしろ公園などで、ホームレスの人たちとつき合っていて、施設で働くことを紹介された。お前も仕事ほしいか。紹介してやろうかということで、無料宿泊所で働くことを紹介されたんです。

アメリカの釜ケ崎を求めて！

吉岡　行く前に思ったことは、アメリカに釜ケ崎があり、アメリカにも釜ケ崎にいてるような人がいるとイメージしていたんです。思いとしては、ホームレスの人に会えば、アメリカの非国民、アメリカに文句のある人に会えるのではないかと思ったんです。そう言う期待で行ったんですが、思っていたような人はいなかった。怒りとか不満とか、なんでこうやねんと言う人々とは会えなかった。

田中　えーえー。ほー。

吉岡　ホームレスの人の側の声が聞こえて来ない。

田中　やはりうけるだけ。

吉岡　はっきり言ってしまえばそう言うことですね。

田中　自分たちでは文句言わんのですか。

吉岡　不思議なんですが、動いているのは、施設を運営する人たちなんです。運動する側ですね。あるいは裁判の中で。いろんな論争はするんですが。実際被害をこうむっているホームレスの人の声は、どうも反映されていない。そういう気がしました。

田中　釜ケ崎のキリスト教協友会のやっているようなことにはならないんですか。労働者と一緒にやるというような。

吉岡　あっちでよく説明したんです。ぼく自身も日本ではこんなところで生活していると。だからこんなことを考え、こんなことがしたいと話をする。ですが、スタッフの人は、それはどうでもよいアメリカで勉強していきなさいと言う。わたしらのしていること勉強して、あんたの町で生かしなさい、とさんざん言われた。

田中　うん。

吉岡　炊き出しの中身を濃くする。ボランティアを増す。環境をよくする。それにはお金がいるが、市だけのお金では充分できないので、民間からお金を集めて、施設の内容をよくする。たとえば図書室を作りたい。本がいる。照明をもっとアットホーム的にするとか。

田中　考えてみれば、ハードの面だけですね。

吉岡　そうですね。

田中　ソフトの面はあまり言わないんですか。

吉岡　言っています。医療カウンセリングが出来るように、そんな人を雇って来るとか、長い研修期間をつくり、その中で職業訓練をする。麻薬の被害者も多いから麻薬から抜け出るためのトレーニングをするとか、いろいろ話はあったのですが、あまり真剣じゃなかった。

田中　ハードはしやすいでしょうね。

ホームレスの人の声

吉岡　納得がいかないのは、とにかくみんなスタッフの側から話が出て来る。実際そこに泊りに来ている人たちの意見は全然反映していなかった。彼ら自身泊っている側の人もあまり要求を出さない。

田中　なんででしょうね。

吉岡　なんででしょうね。

田中　権利意識があるのにね。

吉岡　随分いろんな話を個人的にしたんです、なぜ言わないんだと。

田中　若い人も年よりの人も出さないんですか。不思議ですね。アメリカから来ているスティーバーという牧師に聞いたんですが、アメリカ人は自立心がある。人の世話になるのが嫌いだからというのも一つの原因ではないかと言ってました。それがまたホームレスの原因にもなる。自立心と…とホームレスとは。われわれだったら、親戚などが、ワーワー言って世話したりしますが、そんなことはしない。

吉岡　家族のレベルではどうか知りませんが、しませんね。ヒスパニック系の人たちだったら、かれらだけ集まる町がある。黒人は黒人だけ集まっている。そういう中で生活できるうちはいい。そこからはじき出されると。

田中　失業して…。

吉岡　とくに黒人の若い人には多い。十代、二十代の若者のほとんどは黒人で、かれらはコミュニティーの中に居場所がない。仕事がない。日雇仕事はあるんですが。

手配師に出会う

田中　日雇仕事があるんですが。

吉岡　えーえ。手配師もいる。アメリカには日雇がないと聞いていた。行く前も行ってからも。どんな人に聞いても。大学のえらいさんに聞いても知らない、と言う。労働運動やっている人に会って、日雇あるかと聞いた。そんなものあるわけないと怒られましてね、アメリカは労働運動が発達しているから。

田中　うん、うん。

吉岡　そんな不安定な制度あるはずがないと言うんです。ところが、無料宿泊所で働いていたときのことです。朝早く、目覚ましの係があって朝四時や五時に起きる。

田中　四時。まっ暗でしょう。

吉岡　ええ。まっ暗です。とにかくその時間に起こさなあかん。起こすと、みんな眠い顔して外へ出ていく。一緒に外に出てみると…。

田中　うん、うん。

吉岡　釜ケ崎でよう見るようなワゴンが、ボーンとおいてある。

田中　何台も。

吉岡　ええ。宿泊所の前に。待っているわけですよ。それに皆乗り込んで行くわけです。

田中　屈強な人ばかり。

吉岡　そうでもないんですが。毎日、五十人泊まっているうちの十人以上は、仕事に行ってますね。聞くと建設現場に行くんや、と言う。

田中　建設現場。ほー。

吉岡　聞くと日雇。建設現場。

田中　釜ケ崎みたいに後かたづけしてみたり。

吉岡　いろいろ種類はあるみたいです。

田中　かれらはどのくらい。

吉岡　かれらは、その日は二〇ドル、二〇ドルから三〇ドルぐらい。安いでしょうね。

田中　日本円になおすと。

吉岡　三～四千円です。安いときもあるが、いい仕事だと四～五〇ドル。安いところだと一〇ドルから二〇ドル。

田中　百五十円として、六～七千円になる。それはピンハネなしで。

吉岡　あるでしょう。ロづてで行っているのかと思うと、ワゴンに会社の名前が書いてある。町の中を探すと、ちゃんと事務所かまえている。

田中　手配師、人夫出しの会社。

吉岡　人夫出しの会社。普段から福祉住宅に入っている人や家もっていても仕事ない人は、そこに行って仕事とる。それぞれの現場に行く。ただ、ホームレスの人の場合、家は無料宿泊所ですからそこまで迎えに来る。仕事が終われば送って来る。まあー、無料の飯場みたいなもんです。

田中　うまい話ですね。

吉岡　業者にしてみれば、朝迎えに行けば、寝るところで寝て食事もしているから元気だし、晩はそこにポンと降ろせばいい。晩飯も出るから手間もかからない。

田中　手配師丸もうけですね。

写真説明

▼25ページ　ニューヘブン市にあるホームレスの人々のための緊急宿泊所（シェルター）のベッドルーム。

▼27ページ　吉岡さんが、南部のアトランタ市で見たアメリカの手配師会社トレシーのマイクロバスと会社建物。大阪釜ケ崎で言えば、神明のような大手の手配師会社で、全国にチェーン店をもつ。

アトランタの人夫出し

吉岡　ある機会があって南部の方まで行ったんです。釜ケ崎は南部にあるぞーとも言われたので。

田中　南部。

吉岡　ジョージア州のアトランタ。かなり大きな町です。その町のド真ん中に。釜ケ崎とよく似た所がある。その福祉住宅地帯を中心に一つの寄せ場を作っている。教会が炊き出しをしたり。やたらと酒屋が多かったり。路上で一杯やってたり。

田中　釜ケ崎みたい！

吉岡　臭いからして一緒です。そこにも人夫出しの会社のカンバンが一杯あるんです。看板出してなくても人の出入りの多いところは、あそこは人夫出しやなぁーと言うのを入れれば五十以上あったんじゃないでしょうか。

田中　行政はそれに対して何も口出ししない。

吉岡　あのニューヘブンからはかなり遠いんですよ。往復五千キロぐらいだから。北海道から沖縄ぐらいある。そのアトランタにニューヘブンにある「トレシー」という会社があったんですよ。その会社から追い出された人と親しくなり、路上で酒飲みながら話したんです。なんやお前知らんのか。この会社は知る人ぞ知るチェーン店、と言うんです。

田中　そうですか。

吉岡　東海岸ネットの人夫出しで、冬の寒い間は、このルートに乗っかって、フロリダで働く。暑いときは北の支店で働き、寒くなると南で働く。

田中　転々とする。

吉岡　そこで日本で言う飯場を転々とする労働者に会った。日本、釜ケ崎で言うと人夫出しの神明みたいなところです。かなり儲かっていると言う。こう言う会社はいくつかあるし、ホームレスの人々の弱みにつけ込んで、儲けている会社、制度が現実にアメリカにもあったということです。

田中　社会悪は、どこでもあるんですね。

吉岡　ただ日本みたいに古くから歴史もないし、それだけのシステムがないから、まだまだ日本の寄せ場みたいなことはないんだろうけども確実に儲かって大きくなっていますからね。アメリカのホームレス人口は三百万で、かれらが仕事を求めている限り、仕事をあたえる人夫出しがいてもおかしくないという考え方もある。いいとは思いませんが。

田中　背に腹は代えられないということにつけ込むんですね。人夫出しは古くからあるんでしょう。

吉岡　石炭掘っていたときも、開拓時代もそうですし、ただ、いま都市に溢れているホームレスを利用することでは昔とちがうと思いますが。

田中　プアーホワイト、黒人などを使う。釜ケ崎と同じように。これは無くならないでしょうね。

吉岡　思ったんですが、逆に日本がみえてくると言うか、アメリカにあるホームレスが日本にあってもおかしくない。アメリカに三百万人なら、日本でも町中に何百万人と人が溢れていてもおかしくないでしょう。ところが日本の中では見ずらい。

田中　うん。うん。

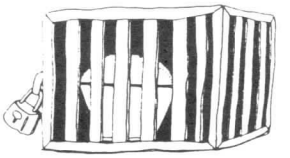
吉岡　なのになぜ見えないのやろー。日本の中には家を持てない人、貧しい、仕事のない人を収容するシステムというか場所があると思うんです。寄せ場とか、飯場とか。そこは決して無料で住めるところではない。自分で銭を出して泊まらなあかん。

田中　そ、そうそう。

吉岡　だから、自分で働かなあかん。儲けなあかん。貧しくても働かなあかん。ピンハネされても働かなあかん。こんなシステムがあって、制度になっている。そこに住まなくても安いアパートに住みながら建築現場で働く。

田中　尼崎にもあるんでしょう。

吉岡　全国どこにでもあります。アメリカは、いまのところ都市に住む人は路上に溢れなきゃあ仕方ない。それで彼らにとりあえず必要なのは寝るところと飯だと言うことで、無料宿泊所が出来る。だから一杯あるんですよ。どちらが



いいと言うわけではないんです。日本の場合、古くから、骨の髄まで使いきるシステムがある。それを効率よく使っているから、目に見えないし誰も問題を感じていない。そして最終的には路上で死んでいく。アメリカは、そこまでやれないのか、やらないのか知りませんけども、日本とは少し違うと思う。問題は家を失った時点、仕事を失った時点で路上にいく。

田中　それは文化の違いでしょうかねー。

吉岡　何がどう違うか知りませんが、アメリカでも人夫出しが儲かり出したら、日本のような寄せ場みたいのも出来るだろうし。

田中　町中にあふれ出させないでしょう。

吉岡　いまアメリカが悩んでいるのは、福祉に金出したくない。その方法を日本から学ぶとすれば恐ろしいなァーと思う。

田中　アメリカの政府は何考えてんでしょうね。日本の行政と比較してみて。

吉岡　たとえば反応が早いですね。貧しい人が社会問題化すると炊き出しをする。だけどその先がない。いろんな人に聞いたんです。これから先どうなる。宿泊所作れば作るほど不足する。すぐ満杯になる。

田中　展望がない。

吉岡　ドンドンふくれあがっていく。一向にへらない。

田中　まだふえていく可能性がある。

吉岡　ホームレスはいろんな問題を含んでいる。

田中　全体がそこに凝縮されていますからね。

吉岡　いまの状態が続けば続くほど、深刻になる。麻薬の問題しかり、麻薬に関連してエイズ、子どもたちの問題。

田中　住民票制度は。

吉岡　登録しないと権利が生じない。戸籍制度はないが、ソーシャルセキュリティーナンバーと言って一人一人に背番号がある。

田中　アメリカ人に？

吉岡　社会保障ナンバーって言うんです。それを基本にして日常生活をしていく。

アメリカと日本

田中　ものの考え方の違いみたいなものは感じましたか。日本人の考え方とアメリカ人と、何かびっくりしたことありますか。全く日本とちがうような。

吉岡　いろんなアメリカ人がいるから、これだとは言えない。たまたまホームレスの人と一緒に生活していて、釜の人間と同じやなと思いながら、違った経験をした。タバコくれや、と相手が言い寄った。わたしに最後の一本だけ入っていたとしますね。最後の一本をあげますわね。相手はびっくりするんですね。これは、お前のや、俺にくれる必要はないと言うことが、十人おったら十人いますね。お前のものはお前のもの。一つの例ですが、相手と自分がはっきりしている。普段見かけるゆずり合い、助け合いはあまりなかった。お互い空腹状態のとき、仕事や食物を分ち合うことが寄せ場ではよく見られるんですが、アメリカではなくて残念でした。

田中　アメリカでは、タバコを半分ずつ分けて喫う。そんなことはしない。

吉岡　寄せ屋さんの中に何人か親しくしていた人がいたんですが、その人たちの中には、やさしいと言うか、分ちあいする人が多かった。最底辺の人たちですが。

田中　アメリカにも寄せ屋さんがいるんですか。

吉岡　います。アキカンが日本より高い。アルミカン一本五セントで引き取ってくれる。

田中　新聞とか。

吉岡　新聞は駄目。アキカンは日本の寄せ屋さんと同じようにショッピングカーに入れている。

田中　その人たちはどんな風にみられているんですか。

吉岡　同じホームレスの人たちの中でも、ほんとに路上で生活し、アキカンを集めて生活している人たちに対しては、やっぱり差別意識がある。

田中　日本と一緒ですね。

今日は、吉岡さんのアメリカ体験を通し、わたしたちの全く知らないアメリカの日雇やホームレスについて詳しくお話が聞けて大変勉強になりました。違うところもあるが、共通点も沢山あることを知らされました。ありがとうございました。

（以上）

大和中央病院死亡事件について

大和中央病院は、釜ケ崎で救急車をよぶと五分の四はここに運ばれる、という病院です。（そして釜ケ崎の中にある西成消防署海道出張所の一日平均の出動回数は二三・四件と日本一です）。そして大和中央は、ズサンな医療日雇労働者を人間扱いしない差別的な態度で広くしられていました。

一九八九年四月二十三日、日雇労働者のMさん（遺族の希望により仮名）は、心臓病による胸の痛みのためドヤから救急車で大和中央病院へはこばれました。しかしこの日「神経痛」といわれ、帰されました。そして翌二十四日Mさんは友だちの住吉さんと一緒に再び大和中央へはこばれましたが、今度は約一時間半放っておかれ、Mさんは心臓をますます悪くし、亡くなりました。住吉さんは大和中央のひどさを眼のあたりにし、それから、主に釜ケ崎医療連絡会議と一緒に、大和中央との事実確認会、遺族への説得を重ね、ついに去年十二月十八日、大阪地裁へ大和中央に対する提訴をおこすところまでこぎつけました。その住吉さんにおききします。

●住吉さんはMさんとは何年前からのつきあいだったんですか。

―二七～二八年前、放出のフロの現場でたまたま一緒になりました。Mさんはとびの仕事で、私はレンガ積みでした。そこで知り合って、それからちょくちょく同じ現場に出るようになりました。そのころは別のドヤに住んでいたんですが、私の住んでいたにしき荘が二十二年前に火事で焼けてから、一緒の「きのくに」に住むようになったわけです。

●住吉さんがこういう大和中央に対するたたかい、運動をやりはじめたというのはどういう理由からでしょうか。

―わしは三十年余りここに住んでいるけど、労働運動とかは無縁の人間だったんだ。というのはな、わしらの考え方というのは、朝おきてお日さまが昇ったら仕事にいって、それでめしがくえると、そういうもんだから。

例えば仕事で、きたないとかあぶないとか感じたことがない。それは誰かがやらなきゃいけない仕事なんだから。

でも、Mさんが死んで、つきそいみたいな形でいったわな、それはナイフで刺したとかピストルでうったとかいうことではないが、見殺しにした、という点では殺人行為なんだ。

わしも、ギャンブルもやるし酒ものむよ、Mさんも入院の記録で、趣味のところにギャンブルって書いてあっただろ。金が入ったらその日のうちに使っちゃう。という考え方なんだよな。

わしは、Mさんが死ぬ三年半前、母親が死ぬちょっと前に二七年振りに実家に帰ったんだよ。母親は八十才で、体温なんかも下がってきてもうあかんな、ていう感じがあった。母親というのはわしにとっては一番大切な人なんだがな、しかしMさんの時とは全然ちがったんだよ。

悲しみとか怒りとかは時間がたったら忘れるもんだがな、Mさんの場合は「神経痛」といわれたり、一時間半も放っておかれたら、やっぱり殺人だと思うもん。母親の時は、最後にはもうあかんという感じになった。しかしMさんの場合は医者が「異常ナシ」いったあとで死んだんだもんなあ。

わしらかて人間なんてみんなあかんで。人のいたみとか苦しみとか、わしら無関係できたやろ。でもMさんの一つの死にあってな、人の痛みとか苦しみとかそれぞれなんとなくわかるようなってきたのは、二年前からなんよ。わしらそれまでデタラメな人間だったからな。

三十年おって、一緒にいた人はどんどんいなくなった。Mさんはその数少ない一人だったんよ。人のいたみなんてそれまではわからんかったよ。

●住吉さんがこのMさんの事件のことで熱意をそそぐ一番の理由は、言葉でいうとどういうことでしょう。

―　それは大和中央のいっていることとやっていることがちがう、ということだよ。事実確認会の時もウソばっかり言っているし、二十四日の経過にしても、わしが見たことと全然違うことをむこうはいってるんだから。

●この裁判や抗議行動を通して、どういう結果が出るのがいいでしょうね。

―　この裁判が勝つかどうかは五分五分だと思うよ。裁判官が医学的なことをきちんと知っていたら、裁判は勝つよ。

救急指定とりけしは難しいけれど、とにかく救急指定病院だったら否応なくはこばれてしまうやろ。一般病院だったら、気にいらなきゃ行かなくてもいい。それでもひどいことすれば又大中みたいにやればいいもんな。それで最後にいいたいんだけど、大和中央はわしらアンコが行っても、病気を見つけよう、原因をみつけようとしない、放ったらかしなんだ。痛んでも点滴でおわり。収容所と思ってるんじゃないか。そういうところをなんとかしたいと思うよ。

―　ありがとうございました。

おつかれさまでした。

これからもがんばりましょう。

（質問構成　生田）

その住吉さんを先頭に広く〝大中〟糾弾（実）が作られました。支援・参加・カンパをお願いします。

「誤診で死亡」と西成の病院訴え

日雇い労働者の弟

（一九九〇年十二月十四日　朝日新聞）

大阪市西成区のあいりん地区（釜ケ崎）で働いていた日雇い労働者（当時六〇）の弟（五八）＝和歌山市在住＝が十三日、「兄が死んだのは、運ばれた病院で誤診さえたうえ、満足な治療を受けられないまま長時間放置されたのが原因」として、西成区にある救急指定病院「大和中央病院」（南克昌理事長）を相手取り、約七百六十万円の損害賠償を求める訴訟を大阪地検に起こした。原告側は「西成区内では年間約百人が身元不明のまま路上や簡易宿泊所で死んでいくが、背景には日雇い労働者に十分な医療が施されていないという現実がある。訴訟を通じて地域の医療を改善していきたい」としている。

訴えによると、志望した労働者は、去年四月二十三日夜、左胸が痛くなり救急車で大和中央病院へ運ばれた。心電図検査で異常が見つかったのにろっ間神経痛の薬を与えられただけで帰された。翌二十四日朝、苦しんでいるところを発見され、再び救急車でこの病院に搬送されたが、不安定狭心症が悪化して死亡した、という。原告は①二十三日の診療で問診、血液検査などを十分にせずろっ間神経痛と誤診した②二十四日に運び込まれた際も約一時間四十分にわたり必要な処置をせずに放置した――と主張、「診療に過ちがあった」としている。

病院側は「突然の提訴で意外だ。患者は、二十三日は治療後徒歩で帰宅、二十四日は診療の結果入院となり、病院としては可能な限りの治療をした。訴状を見たうえ法定で主張をしていきたい」としている。

大和中央病院の差別・殺人医療糾弾実行委員会（略称：大中糾弾実）
（郵便）
大阪市西成区萩之茶屋二―五―二三　2F
TEL　〇六―六三二―四二七三（釜日労方）
（直接には毎週金曜日午前時～午後四時
TEL　〇六―六四一―七一八三（旅路の里方）
（会費）月一口一〇〇〇円（団体は二口以上）
カンパ・会費送り先：
郵便振替大阪四―七九七二六
釜ケ崎医療連絡会議